
強盗

ポイ宇宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強盗

【Nコード】

N1392D

【作者名】

ポイ宇宙

【あらすじ】

時効制度が変わった世界で時効寸前の強盗犯にトラブルが

（前書き）

パツと思いついてパツと書いたので、いくつもおかしいところがあるかもしれませんが、最後まで読んでやってください。

いよいよだ。いよいよ、おれの時効が迎えられる。一年前に最後に見たテレビによると、時効制度が変わり、どんな事件でも時効はわずか一年に短縮されるといった制度ができたらしいのだ。これは、あまりにも長すぎる逃亡生活で時効を迎えても人間として精神を保つことができず、廃人になってしまいうケースが多かったため作られたものだ。

それを知った日から俺はまず、人と接しないように一年間過ごすことに決めた。まず、したことは、一年間の食料と飲み物の買い出しだ、これは外に出て人に見つからないようにするためだ。そして、テレビも新聞もなくした。この二つをなくしたのは徴収係の人間と会わないようにするためだ。一応情報源としてラジオを用意したのだが不運なことになったの二日で壊れてしまった。新しい戸籍を手に入れていたのだが念には念を入れて徹底することにした。たったの一年我慢すればその後の生活は保障されるのだから。そして、その苦労もありいよいよ一年が経とうとしていた。

今日一日を無事過ごすことができれば俺の逃亡生活は幕を閉じる。犯罪で稼いだこの大金を使って豪遊して一生を過ごすことができる。明日の今頃、俺は人のたくさんいる銭湯でのんびりと過ごし、その後テレビ、女、パチンコ、なんでもできる。食べ物だって缶詰じゃなく、好物の焼き肉も食べられる。たまらないな、こんな時効制度作ってくれた政治家たちに感謝したいものだな。

俺は時計を見た。今時刻は午前の11時。あと13時間だ。いつも通り、ひまを潰すために小説を書こうかな。一年も書いていると、ものすごい量の分量になり、原稿用紙1000枚を超えた。この小説は俺の時効終了とともに終わらせようと考えていたので今日が最終回だ。4時間後、今俺は最後の一文を書いた。

終った。達成感が体中に満ちた。そして、あと9時間すればさらに極上の達成感を感じることができる。

この小説のように俺もハッピーエンドを迎えられる。

そんなことを考えていた時だ。

ドンドン。乱暴にぼろアパートのドアをたたく音がした。

当然、人と会うことはできないので俺は居留守を使う。しかし、音は一向に鳴りやまなく、さらに乱暴にドアが叩かれた。5分もしただろうかバンという銃声がしてドアに穴が開けられ鍵を外された。

警察か？！

がドアを乱暴に開いた者は警察ではなく俺と同じ種族の犯罪者だった。顔をマスクで隠し手には拳銃もう一方の手には一万円札がはみ出ているバッグ。そして、男の付けている白い軍手は真っ赤に染まっていた。どうやら、この男は俺と同じように強盗殺人をしてきたようだ。

「おい、お前、俺はさっき強盗をしてきたところだ。そして人も殺した。殺されなくなったら人質になれ」

そう言つて男は土足で銃を私に向けながら近づいてきた。

なんとということだ。あと少しなんだ、あとわずかなのに何故こんな時に来るのだ。

こいつがこんなに急いでいるということは確実に警察に追われている途中のはずだ。

どうする、抵抗することは不可能だろう少しでも抵抗すると迷わずこいつは私を殺し、隣の部屋のを人質にするだろう。困った。

警察が来ると私は捕まってしまう。そうすると今までの苦労がすべて水の泡になり私の一生は刑務所で迎えることになる。どちらを考えても私の一生は無駄に終わる。

待てよ。私の時効まであと9時間だ。と言つことはあと9時間この男の人質になればよいのではないか。私は犯罪者だが人質だ、警察も簡単に踏み込めないだろう。

よし、ここは素直に人質になろう。

「わかった、その代り命は助けてくれ」

「いいだろう、お前がおとなしくしていたらな」
ほっとした時だ、

「ついに、追いつめたぞ、観念しろ」

警察が強盗の開けたドアの前に3人銃を構えて立っていた。それと同時に強盗は私を乱暴につかみ手に持っていたピストルを私のこめかみに向けた。

「来るな。それ以上来たらこの男を殺すぞ」

「うっ、分かった」

警察はそれを見ると銃を向けながらもわずかに後ろにさがった。

「あっ」

その中の一人の刑事が私の顔を見て驚いた。

「あっあいつあの人質、連続強盗殺人犯で指名手配されている男だ」
ちっ、やはりばれたか。だが、どうすることもできないはずだ。たとえ人質が凶悪犯だろうと人には変わりない、見捨てることはないだろう。

「おい、お前らとりあえず、そこから去れドアを閉めてな、そして俺の目に見えるこのアパートの下にいる。もし、階段を上ってくる音が聞こえたら迷わずこの男を殺すからな」

それを言われると警察はどうしようもなく、とりあえず一階へと降りて行った。

助かった。

「おい、お前、まさかお前が凶悪犯だったとはな」

強盗は心底驚いていた。だが、私ほどではない。とりあえず、こいつはこの後のことを考えていないようだ。なんせ、私を人質にするぐらいに追い詰められているのだからな。

「ちっ、まあ、いい。今は、お前は人質だ」

強盗は私に銃を突きつけ、窓を開け外に警察とマスコミがいるのを確認した。その中に先ほどの刑事たちもいる。

「さて、どうするか、ここで籠城していてもどうしようもない、困

ったものだな」

「おい、犯人。お前は完全に包囲されている。どうやってもそこから逃げることはできない、直ちに人質を解放して自首しろ」

拡声器をもった刑事が言うように、私の目にたくさんの刑事が映る。その中には、重装備をした者もいた。

確かにどうやっても逃げられないようだ。

「くそ、ここまでか。あとちょっとだったのに、あきらめるしかないか」

なんてことだ。まだ、一時間もたっていないのに、今こいつが自首すると私も捕まってしまう。どうする、なんとかしてこいつを説得しないと。

「あきらめるな。まだ、なんとかなるはずだ。私でさえ今まで逃げきれていたのだから。」

お前だったら逃げきれるはずだ」

「なるほど。お前の言葉を聞いて、勇気が持てた。分かったもう少し頑張ってみよう、もしかしたら何か光明が見えるかもしれないしな」

一時間に一回このような説得を繰り返し私はなんとか時間を引き延ばした。

まったく、なんて弱気な強盗だ。私を人質にしようとした時の強気はどこにいったのだ。

くっ心臟が痛い。時計と警察、そして強盗の動きに気を使わないといけない、とてもじゃないが精神が持たない。たのむ、もう少し早く時計よ、動いてくれ。

一階では警察があわただしく動いている音が聞こえ、いつ強行突破してくるのだろう不安だ。

9回目の説得の時。

「うつ、もうだめだ、いくら待っても何も変わりはない、さつさと自首するべきか」

やばい。今までにないくらい、あきらめムードが漂っている。なん

とか、話をして時間を引き延ばさないと。

「おい、強盗。お前は何故、そんなに弱気なのに強盗をしたのだ」

「俺には、余命が残りわずかの母がいるんだ。俺は昔から、母に迷惑をかけ続けていた。」

だから、せめて最後に親孝行をしたいのだが、いかんせん俺には全く金がない。職にも就いていない。だから、強盗をしたのだ。だから、どうしてもこの金を母に渡したいのだ」

「まったく、すばらしい。お前は俺と同じ人種と思っていたのだが、どうやらまったく違ったようだ。私はお前と違い私利私欲のために強盗を働いた。感動した。がんばれ、ここであきらめるな。親孝行するために」

思わず感動してしまった。当初の予定では私が時効を迎えると同時に、得意の合気道でこの男を取り押さえようと思っていたのだが、考えが変わった。この男の逃亡に協力しよう。

ジリリリリリリ。

アラームが鳴った。どうやら、無事私は時効を迎えたようだ。

「なっなんだ」

「強盗。お前の逃亡手伝ってやろう。その押入れを開けてみる。そこに不自然な床がある。そこを開けてみる。地下につながっている。そこ降りると下水道にできることができる。」

後は好きなように逃げろ」

「なぜ、お前は私を」

「決まっているだろう、お前の話に感動したからだ、さあ行け、どうやら警察が突入してくるらしいぞ、そんな話が下から聞こえる。早くしろ」

「すすまない、いずれ礼をさせてもらう」

強盗はそう言って私の作った脱出路を使って逃亡した。

無事、逃げきれよ。私のように。

パリン。私の部屋の窓を割り、なにか鉄の塊が部屋に入ってきた。まばゆく強烈な光が固まりから発せられ、俺の視界は真っ白になっ

た。

閃光弾のようだ。バタバタと何人もの人間が私の部屋に乗り込んでくる。

バカなやつらだ。私は時効が来てもうただの一般人で、強盗は俺の脱出路でもう、ここからかなりのところまで逃げている。税金の無駄使いだ。

さて、じゃあさっさと事情聴取を終わらせて、遊びまわるか。

しかし、私の予想外の動きを奴らは始めた。

「おい、確保だ、確保」

そう言う声がすると同時に私は何かにはがいじめされた。それがなんなのかわかった。

大の男たちだ。それも、機動隊。どうやら、こいつらは私が時効を迎えたことを知らないようだ。まったく、馬鹿なやつらだ。

「よし、犯人確保！！」

んっ？なにかおかしいぞ。

「おい、私は時効を迎えてもう自由の身だぞ」

私がそう言うത്とマスク越しだが男たちの表情が変わったように見えた。

「・・・なにを言っているんだお前は」

「なにつて、一年前に制定されただろう、すべての犯罪者の時効を一年にするよ」

はっはははははは。周りの機動隊員たちが一斉に笑いだした。

「なにを言っているのだ。その制度は、それからすぐに変更されただろう。」

被害者たちが、組合を作つてな。そして、その結果時効というものはなくなった。つまり、お前はいまだに犯罪者だ」

なんとということだ。まさか、あの準備が裏目に出してしまうとは・・・用心することに越したことはないが、まさかこんな結末とは。

やはり、現実小説のようにはうまくいかないもののようにだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1392d/>

強盗

2010年12月8日11時04分発行